W-3-3

非典型的な語彙的使役構文における「かのように」性

長谷川明香（東京造形大学）
sayakahase@gmail.com

1. 本発表の目的

本発表は、日本語の語彙的使役構文の非典型的用法のうち、介在性用法と経験者主語用法を取り上げる。この 2 つの用法は、典型的用法とは異なり、主語（の指示対象）による働きかけの直接性などの特徴を欠いた事態に適用される一方で、典型的用法と同じく、主語を責任の所在として捉えていると言える。その意味で、これらの用法は一見非使役的な事態を使役的事態であるかのように語っている。

> **野矢**　…「花子は交通事故で息子を死なせてしまった」は、実際には花子は何も働きかけていないし、意図的でもない。プロトタイプからひじょうに離れた例なんですね。でも、事実としてはプロトタイプから離れているのだけれども、それでもやっぱり使役のプロトタイプがもっていた見方がここに投影されているような気がします。つまり、交通事故で息子が死んだという事実を、あたかも花子の行為が意図的に引き起こしてしまった何ごとかであるかのように語る。（西村・野矢 2013: 123-124）

この介在性用法と経験者主語用法がもつ「かのように」性とはいかなる性質のものなのだろうか。また、他の発表で扱われる「かのように」性とどのように異なるのであろうか。本発表は、これらの問いへの答えを、事態に対する話者の捉え方を積極的に理論に組み込んだ認知文法の観点から探る試みである。

2. 日本語の非典型的な語彙的使役構文の 2 用法[1]

日本語の語彙的使役構文の典型は、(1) のような、自動詞と規則的に対をなす他動詞が、生産的な使役の形態素を伴わずに用いられ、「人（主語の指示対象）が自発的意図[2]に基づいて自分の身体を動かして他の人・もの（目的語の指示対象）に対して直接働きかけ、その結果、目的語が主語の意図通りの変化を被る事象」を表わすと考えられる。その際、主語が結果事象生起の責任を負う。

(1)　太郎は（暑かったので）窓を開けた。

一方、(2)-(3) に示す 2 つの用法は、どちらも、主語が動詞句が通常表わす行為の主体であるとは言い難いという意味で、語彙的使役構文の非典型的用法であると言うことができる。

(2)　介在性用法：主語が、実際の行為者ではなく命令・依頼している人物である場合[3]
　　a. ニクソンがハノイを爆撃した。

---

[1] 各用法の詳細な議論は、長谷川（2010a、2010b、2011）を参照されたい。
[2] 誰か・何かに強制されていた（例えば「銃で撃つぞ」と脅されてドアを開ける）としても、脅された人間は「ドアを開ける」という行為を意図的に行なっている。しかしながら自ら望んでその行為を行なったわけではない。その意味で脅されてドアを開ける状況には意図性はあるものの自発性はないと考える。
[3] 例 (2) のような用法を佐藤（2007 [2005]）にならい「介在性」と呼ぶことにする。本発表の「介在性用法」は、Ikegami（1982）の indirect causation、および、長谷川（2010b）の間接使役構文と同じ範囲を指す。

b. 聖徳太子が法隆寺を建てた。

c. 花子は先週髪を切った。

(3) 経験者主語用法　動詞句が含意する変化が主語の働きかけなしに生じている（主語以外のものの働きかけにより生じている）と考えられる場合[4]

a. 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。（井上 1976: 66、下線省略）

b. 花子は、落雷で、パソコンを壊してしまった。

cf. 息子二人をその戦場で死なせた。（寺村 1982: 300、原文は漢字・片仮名表記）

動詞句が含意する変化（(2a) ハノイの破壊、(3a) 家財道具の焼失）の直接の原因（(2a) 爆撃機に乗り込んだ兵士、(3a) 空襲）があるにもかかわらず、主語が引き起こしたかのような形式をもちいて表現するのはなぜなのだろうか。

介在性用法においては、主語が実際の行為者に社会慣習などに従って働きかければ、行為者の目的語への行為は抵抗なく遂行されるという意味で、主語に事態生起の究極の責任があると見なすことができる。経験者主語用法においては、他の力によって目的語にもたらされた変化に対して、許容使役[5]の解釈、すなわち、「ある事態の実現は、それを妨げようと思えば妨げられた立場にある者が、それを妨げない、ということによって成ったという見方」（寺村 1982: 300）が適用された結果、主語を動作主として捉え直し結果事象生起の責任の主体として認識することが可能となる。このようにして、それぞれの用法の主語が典型的用法の場合と同じであるかのように再カテゴリー化されるのである。

こうした使役構文における主語の選択については、因果連鎖の中のプロファイルされた部分において、左の先端にくるものを主語、右の先端にくるものを直接目的語と考えることができるという Langacker（1990: 217）の指摘が参考になる。加えて、事態（因果連鎖）を捉える粒度を調整し、因果連鎖の中間段階における行為者を捨象する能力（cf. Talmy 2000、Pinker 2007）を我々がもっていることを考え合わせると、問題としている (2)-(3) のような用例が記述する事態においても、(2)-(3) の主語を、結果事象の引き起こし手であるとカテゴリー化することは自然であろう。

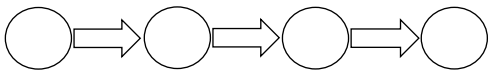

図 1. 因果連鎖のモデル

3. 介在性用法と経験者主語用法の違い

本発表で取り上げる日本語の語彙的使役構文の介在性用法と経験者主語用法には、どのような違いがあるのであろうか。また、介在性用法については、英語でもある範囲は語彙的使役構文をもちいることができるが、経験者主語用法の場合には非常に難しい（cf. 西村 1998: 175）。この日英語間の相違はどのように考えたらよいのであろうか。また、日本語内部だけ考えても、経験者主語用法の容認性は介在性用法と比べて（著しく）低い、あるいは個人差が大きいという点も注意しておく必要がある。

2 用法の違いを考えるうえで一つ注目すべきは、主語のもつ、結果事象生起への「意図性」の有無である。介在性用法においては、実際の行為者に命令・依頼している時点で結果事象を生起させることを意図してい

[4] 「経験者主語用法」という名称は井上（1976）を参考にしたものだが、その範囲は天野（2002）の言う「状態変化主主体の他動詞文」と基本的に対応する。

[5] ここでの許容使役は許可を除く。許容使役についてはたとえば Comrie 1989[2] [1981[1]]: 171、寺村 1982: 300）を参照。

るうえに、行為者への働きかけ（命令・依頼の行為）もまた意図的である。一方、経験者主語用法においては、主語は結果事象が生じることを意図しているわけではない。(3a) であれば、「自分の家財道具がみんな焼けてしまう」という状況が発生して（あるいはその発生を認識して）はじめて、「自分はそれを防ぐ立場にあるのに防ぐ手立てを何も講じなかった、その意味で自分が結果事象を引き起こした（とも言うことができる）」と反省的に思考するのである。ここから、経験者主語用法のほうが介在性用法よりも、典型的用法からの逸脱が著しいのは明らかである。

経験者主語用法は、いくらか典型的用法に近い (4) の非意図的用法からの拡張としても捉えることができる。どちらも結果事象の生起を主語が意図していないという特徴を有しているが、(4a) では、太郎は花子に電話をかける行為を意図的に行なっていて、その行為が原因となって結果事象が生じているために、責任の所在が同定しやすい。

(4) 非意図的用法：主語が、意図しない結果を引き起こす行為を行なっている場合

a. 太郎は夜遅くに電話をして花子を起こしてしまった。

b. 洋子は机の拭き掃除をしていたときに、花瓶を落として割ってしまった。

cf. 餅つきをしていたら、誤って杵を友人の手の上に落とし、骨折させてしまった。

このように相対的に典型的用法に近い非意図的用法の延長線上に、経験者主語用法 (3) を位置づけることができる。以下に示す (5)-(6) は (4) と (3) の中間例である。(5b) においては、寝ている状態なので意図的にベッドから落ちることなどありえないが、私の動き以外に原因は考えられない。(6) は「スコール」「夕立」が原因とも考えられるが、経験者主語用法でよく取り上げられる天災や戦争と比べて、現実的に対処が可能であり、その意味で主語の過失であるという意味合いがより強く感じられるであろう（また、それに応じて (3) よりも容認性が高いと考えられる）。

(5) a. 太郎は転んで、脚を折ってしまった。

b. （私は）寝ているときにベッドから落ちて、脚を折ってしまった。

(6) a. （東南アジアではスコールがよくあるとわかっている状況で）
兄は昨日スコールで、鞄に入れていたノートパソコンを壊してしまった。

b. （夕方雨が降るという天気予報を見た後に外出した場合、あるいは、洗濯物を干している家に自分がいる状況で）
私は夕立で、外に干しておいた洗濯物を濡らしてしまった。

4. 2つの非典型的用法における「かのように」性

(7) の仮想移動表現や (8) の仮想変化表現では、記述される事態そのものにおいて客観的な移動・変化は生じていないものの、ある種の事態を認識する際に辿る心的経路が、実際に生じる移動・変化を認識する場合と同じであるために、同じ言語形式（「走る」「丸くなる」）が使用されると考えられる。

(7) 高速道路が京都まで走っている。

(8) 部屋が丸くなっている。

(9) を例にとると、(9a) は図 2 の左図、(9b) は図 2 の右図に対応する[6, 7]。左図では、概念化の客体（記述される事態）上の実際の移動（2 つの円に挟まれた太い矢印）を把握する際の心的走査を C（conceptualizer；概念化の主体）から伸びる点線矢印で表わしている。大文字の T は事態を把握する時間（processing time）のことであり、その上の細い実線矢印が把握時間の経過を表わす。太い矢印が、図が左から右にいくにつれて希薄化する一方で、概念化の主体の心的走査は変わらず存在する点が重要である。

（9） a. The child hurried *across* the busy street.
b. Last night there was a fire *across* the street. （Langacker 1999: 301、強調は引用者）

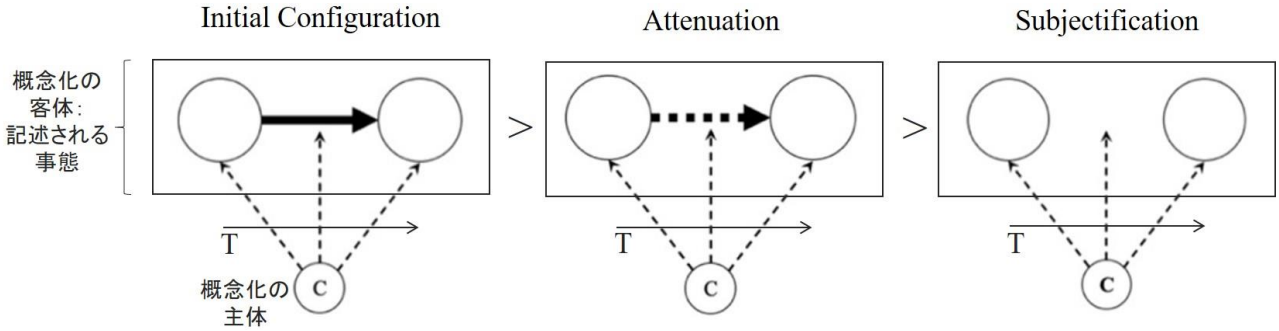

図 2. 認知文法における主体化（Langacker 1999: 298 をもとに作成）

Langacker（2008: 528-530）の扱った別の仮想移動の例 (10) にも目を向けよう。実際の移動 (10a) と仮想移動 (10b)-(10c) はそれぞれ図 3(a)、図 3(b) に対応するが、図 3 の (a)-(b) において両者の違いとして際立つのは小文字の t（conceived time；事態が展開する時間）の有無である。図 3(a) において t は概念化の客体の側に属しており、図 3(a) 全体には、概念化の主体が事態の展開（ピッチャーの移動）をその展開の流れにしたがって順次認識していく側面が組み込まれている。一方の仮想移動の図 3(b) では、記述される事態の側に t は入っていない。

（10） a. The pitcher *ran from* the bullpen *to* the mound.
b. An ugly scar *runs from* his elbow *to* his wrist.
c. An ugly scar *runs from* his wrist *to* his elbow. （Langacker 2008: 529、強調は引用者）

[6] Langacker（1999）は (9a)-(9b) の across に特化した別の図を示しているが、紙幅の都合と本発表のこの後の議論との関係で、ここでは主体化の概略を述べるための図である図 2 を採用する。
[7] 図 2 の中間段階（Attenuation）に対応する例文として、たとえば "You need to mail a letter? There's a mailbox just across the street."（Langacker 1999: 301）がある。この例の場合、記述される事態そのものに実際の移動はないが、聞き手がこの発話を聞いた後に移動することが暗示される。

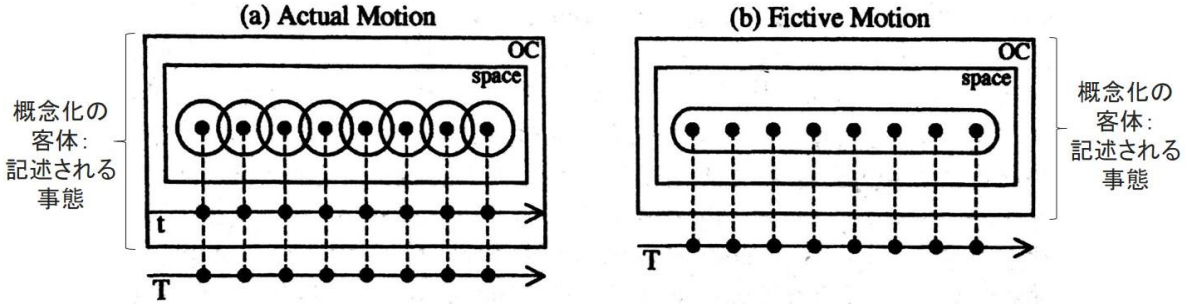

図 3. 例文(10)における run の意味構造（Langacker 2008: 529 に加筆）[8]

Langacker（2008）は (10) のような仮想移動を検討したのち、Matsumoto（1996）が指摘するような仮想変化 (11) についても同様のことが起こっていると述べ、以下の引用に示すように分析している。

（11） a. *broken* vase, *detached* retina, *scattered* marbles
b. *broken* line, *detached* garage, *scattered* villages （Langacker 2008: 530、強調は引用者）

> [t]he change designated by the verb stem is only virtual, serving to specify how the actual situation deviates from one considered neutral or more typical. … [*B*]*roken vase* invokes an actual change through time, a physical progression manifested in the vase itself, hence objectively construed. By contrast, the change invoked by *broken line* is subjectively construed. It does not inhere in the line itself, but rather in the conceptualizer, as a mental progression in which the profiled state is viewed as departing from the canonical one. Being only virtual, the change is not conceived as unfolding through time. The mental progression (residing in sequential access through processing time) is, nonetheless, a vestige of *break*'s dynamicity. （Langacker 2008: 530）

以上みてきたように、仮想移動表現や仮想変化表現[9]については、問題の事態に対してこうした言語表現を適用することで記述される事態そのものに変更が生じているわけではなく、概念化の客体に実際の移動や変化が組み込まれているわけではない。一方、介在性用法や経験者主語用法では、話し手が記述される事態を（典型的な用法の場合と通底する）因果連鎖を読み込む形で概念化していると考えられる。(12) ではハノイ爆撃に関わる軍の指揮系統の最上位の人物を、(13) では自分の家財道具が焼失することを防ぎえたかのように捉えられた空襲の被害者を、それぞれ因果連鎖の起点に位置づけるという、当該事態の再カテゴリー化を行なっている。つまり、概念化の主体が記述される事態に踏み込んで問題の事態を捉え直し、因果連鎖の起点を新たに付け足すことで再構成している。これは、当該事態を（ある意味で）典型的用法の表わす事態と同じものであるかのように捉えようという試みであると言える。

（12） ニクソンがハノイを爆撃した。(=(2a))
（13） 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。(=(3a))

---

[8] ここでは OC（objective content）の性質について、類似概念との違いなどの詳細には立ち入らない。
[9] 本ワークショップの他の発表で示されるように、仮想変化表現がここで考えているよりも多岐にわたるとすると、本発表の最終節で言及するような段階性、あるいは、Langacker（1999）の挙げた across や be going to の主体化の段階性を仮想変化においても認めることが妥当かもしれない。

5.　主体性の軸で連続的に捉える～まとめに代えて

Langacker（1999: 301-302）において例 (14a) から (14e) にかけて動作主性が失われていくということ、一方で (15) のように keep tabs on という熟語の tabs を主語にはできないことが指摘されている。その意味で、確かに (14e) では Edward の動作主性、責任性は非常に希薄化されているものの、記述される事態の中から完全に消えてしまっているわけではないと言える。

（14）　a. Edward frightened the hikers by jumping out of the bushes and shouting at them.
[source of volitional physical action]
b. Edward frightened the other hunters by accidentally firing his rifle. [source of non-volitional physical action]
c. Edward frightened the priest by believing in satan. [locus of mental attitude]
d. Edward frightened the children by being so ugly. [locus of property reacted to by others]
e. Edward frightened his parents by not being among the children getting off the bus.
[mere association with circumstance reacted to by others]　（Langacker 1999: 301）

（15）　*Tabs frightened civil libertarians by being kept on all the dissidents.（Langacker 1999: 302）

本発表で示した経験者主語用法 (3) も、同様に、(1)>(4)>(5)>(6)>(3) というスケールの内に位置づけることができるであろう。日本語の語彙的使役構文は英語と比べ、概して、因果連鎖を伸ばす（遡る）ことを許容する傾向にあると考えられるが（cf. Ikegami 1982）、それでも経験者主語用法の容認度を著しく低いと判断する母語話者もいる。日本語には間接受身という別の構文もあるため、(3a) と同じ事態に遭遇した時に「私たちは、空襲で家財道具をみんな焼かれてしまった」のように表現できる（cf. 息子二人にその戦場で死なれた）。これらの棲み分けがあるため、経験者主語用法は、主語の動作主性、責任性が全く感じられない事態にまでは拡張されていないと考えられる。

参考文献

天野みどり（2002）『文の理解と意味の創造』笠間書院／井上和子（1976）『変形文法と日本語・下』大修館書店／佐藤琢三（2007 [2005]）『自動詞文と他動詞文の意味論』再版，笠間書院／寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版／西村義樹（1998）「第 II 部　行為者と使役構文」中右実・西村義樹『構文と事象構造』研究社出版．pp.107-203／西村義樹・野矢茂樹（2013）『言語学の教室　哲学者と学ぶ認知言語学』中央公論新社／長谷川明香（2010a）“A figurative approach to non-prototypical agents”『杏林大学研究報告　教養部門』第 27 巻．杏林大学．pp.109-118／長谷川明香（2010b）「英語における間接使役構文の動機づけ」『東京大学言語学論集』第 30 号．東京大学人文社会系研究科・文学部言語学研究室．pp.27-37／長谷川明香（2011）「日本語の特殊な使役構文をめぐって」『杏林大学研究報告　教養部門』第 28 巻．杏林大学．pp.107-116／Comrie, Bernard. 1989[2] [1981[1]]. *Language universals and linguistic typology*. University of Chicago Press. / Ikegami, Yoshihiko. 1982. ‘Indirect causation’ and ‘de-agentivizaion’. *Proceedings of the Department of Foreign Languages, College of General Education, University of Tokyo*. 29(3): 95-112. / Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, image, and symbol*. Mouton de Gruyter. / Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and conceptualization*. Mouton de Gruyter. / Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive grammar*. Oxford University Press. / Matsumoto, Yo. 1996. Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In Fauconnier. Gilles and Eve Sweetser (eds.) *Spaces, worlds, and grammar*. University of Chicago Press. 124–156. / Pinker, Steven. 2007. *The stuff of thought*. Viking. / Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics*. vol.1. The MIT Press.